

Title	懐徳堂物語(三): 幕末期の懐徳堂
Author(s)	山中, 浩之
Citation	懐徳. 1984, 53, p. 5-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 懐徳 堂物語(三

――幕末期の懐徳堂―

山 中 浩 之

考えてみたいと思います。問題点についてふれながら、廃校の経緯と理由についてれをうけて、従来あまり知られていない幕末期懐徳堂のの原因を探ることからおはじめになりました。今回はそ至ります。実は、この連載の第一回目、加地先生は廃校

(-)

も、篠崎小竹の梅花社、藤沢東畡の泊園書院、広瀬旭荘かこと、口多くの寺子屋・私塾が廃滅するのは明治五年の学制によってであるが、懐徳堂の閉鎖は明治二年であり、それとは無関係であることなどをのべられました。 私もその通りだろうと思います。幕末の大阪に限って整が打撃をうけ、生徒が減少したためというのは当らな 型が打撃をうけ、生徒が減少したためというのは当らな

懐

徳堂

の九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけの九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけの九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけの九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけの九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけの九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけ

ぜでしようか。懐徳堂が衰退したからでしょうか。と、懐徳堂のことがあまり出てこないのです。それはなす。 当時の 諸家の文章や 記録に、それ以前とくらべると、懐徳堂のことがあまり出てこないのです。それはなどにくらべると、幕末期における懐徳堂は、ややそれらどにくらべると、幕末期における懐徳堂は、ややそれらどにくらべると、幕末期における懐徳堂は、ややそれらどにくらべると、幕末期における懐徳堂は、治園、旭荘塾なただそうはいっても、さきの梅花社、泊園、旭荘塾な

園という非常な才能ある兄がいたからです。その蕉園はていなかったにちがいありません。というのも彼には蕉した。碩果は自分が懐徳堂をになったのは中井碩果(七郎)での後をうけて懐徳堂をになったのは中井碩果(七郎)での後をうけて懐徳堂をになったのは中井碩果(七郎)での後をうけて懐徳堂をになったのは中井碩果(七郎)での後をうけて懐徳堂をになったのは中井碩果(七郎)での後をうけて懐徳堂は、他の多くの学者たちとの竹山・履軒時代の懐徳堂は、他の多くの学者たちとの

とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょうか。 とれはどうしてでしょう。 とれはどうしてでしょうか。

竹山歿後、尾藤二洲が頼家にあてた書簡の中で「七郎竹山歿後、尾藤二洲が頼家にあてた書簡の中で「七郎なかな姿勢がみられます。したがって学芸界の中に彼のをにいています。はされず候」と、やや気がかりな様子でのべています。成されず候」と、やや気がかりな様子でのべています。成されず候」と、やや気がかりな様子でのべています。

やってきますが、そこで頼ったのは篠崎小竹でした。そ年、頼山陽は備後神辺の菅茶山の塾を出奔して、大阪へ陽との間には 交友関係が ほとんど ありません。 文化八り、頼家とは親縁関係にありました。しかし、七郎と山ただ七郎の 妻おていは、 頼山陽の 母梅颸と 従妹であ

みたと、『梅颸日記』に記す以外、ほとんど知ることが月、母梅颸に同行して懐徳堂に来、「竹山先生遺稿」をからも、懐徳堂と山陽との交渉は、文政七年(元三)九れません。しかしその後、山陽が京に住むようになってしく叱責していたので、懐徳堂を敬遠していたのかもしのときは中井履軒がまだ健在で、山陽の行跡について厳のときは中井履軒がまだ健在で、山陽の行跡について厳

できません。

実ま頁果の時代こおいて、最も蚤斉的こま豊かであっは必ずしも懐徳堂の衰退ということではありません。表面的な活動は少なくなったようです。しかしそのこととだといえます。これによって懐徳堂の学芸界におけるのです。碩果時代に顕著なのは、交友の狭少化というこのです。碩果時代に顕著なのは、交友の狭少化というこ

者たろうとしなかったにもかかわらずです。どうしてでしょうか。学芸界ではなばなしく活躍する学たといわれているのです(『懐徳堂考』その他)。それは実は碩果の時代において、最も経済的には豊かであっ

私は、おそらく、そのことがかえって安定した経営を

た。 碩果はそれを そのまま ひきつぐことが できたので―懐徳堂という学校の著名度と多くの門人―がありましひきついだ 懐徳堂には、 竹山、 履軒ののこした 遺産、成立たせたのではないかと思っています。つまり碩果が

懷

堂物語(III)

ず、書生たちがそのまま放っておくのを見過ごしている が、また経営安定のための一つの選択でもありました。 が、碩果の経営方針であったように思われるのです。そ ような様子で、師の放任と書生の乱れに、この筆記者自 草盆や行灯をひっくりかえしても、師の碩果が叱りもせ たちの 生活態度の 悪さが目立ちます。 書生たちが、 になっているような印象をうけるのです。そして、 いうのではなく、師の方も学生の方も、 と、たいてい雑談がなされています。雑談がいけないと 人の筆記がのこっていますが、それをみますと夜講のあ たようです。『懐徳堂夜話』という碩果の授業を受けた したが、反面、教育面での厳しさを薄めることにもなっ れはたしかに一面では消極的、閉鎖的な形でありました 広がりをおさえて、懐徳堂内部のつながりを強めること 堂の安定維持を図ったように思われます。つまり外への せず、それら門人と懐徳堂との関係をできるだけ親密に す。そうしてその門人をことさら拡大するような活動 ただそのようなあり方は、内での親密さを増しはしま かれらとのつながりを強くすることによって、 むしろ雑談が 書生 懐徳 主

内部的な親密さを強めて、外からの刺激を薄めてしま

身でさえ腹を立てているほどです。

がら、 と授業のマンネリズムを結果してしまったのではないで 碩果時代における懐徳堂の変質をこのように考えていま しょうか。保守化することで安定経営をめざそうとしな った碩果時代の懐徳堂では、このような生活態度の放任 内での緊密度を弛緩させてしまったのです。私は

代の懐徳堂についてのべ、その廃校の理由に説き及びた しか見るに至っていませんが、これによって少し寒泉時 ままみるような日記といえます。その膨大な日記の一部 り合わされたもので、質素で几帳面な寒泉の人柄をその 包み紙などをも利用し、大きさも不揃いの紙を用いて綴 て保存されています。それはいろいろな反古紙や祝儀の あるものの、五十七冊が現在、 こしています。それは『居諸録』と題されて一部欠落が 年歿するまで、 です。寒泉は森小路に塾を開いた天保三年から明治十二 教授となったのは並河寒泉でした。寒泉四十四歳のとき が、碩果には男子がありませんでした。その後をうけて 碩果は天保十一年(1公0)三月二十四日病歿しました 四十七年間にわたる膨大な日記を書きの 天理図書館に貴重書とし

いと思います。

代史会読〕九の日〔升堂教授、夜講易〕十の日〔休日 注目されるのは、 午後文会または詩会〕 の日〔升堂教授、夕講近思録〕八の日〔升堂教授、夕五 易〕五の日〔休日、午後記事会〕六の日〔升堂教授〕七 の日〔升堂教授〕二の日 二年六月からあらためて書き出しています。そこでまず 寒泉は碩果死後、 〔升堂教授、夕五代史会読〕四の日〔升堂教授・夕講 非常に規則正しい講業の営みです。一 一時途絶えた日記を、 〔升堂教授・夜講近思録〕三の その翌天保十

日

ます。五と十の日は休日ですが、 の寄宿生と通学書生とを対象に行われたものだと思われ 夕は会読を行なっていますが、これはおそらく学問専攻 堂教授」すなわち講堂で素読を中心とした年少子弟 を呈したといいます。この夜講を基本に、午前中は れ、そのあかりの中で多勢が聴講するさまは、 はずして三室ぶっとおしにし、講堂には燭台がめぐらさ て行われております。この夜講は玄関から講堂まで襖を 教授が毎日行われています。そうして三の日と八の日の っている公開講義ですが、それが規則正しく寒泉によっ 二・七・四・九の夜講は、 懐徳堂設立以来の伝統とな その午後に行われた記 一種壮観 への

の会であったことがわかります。事会・文会・詩会もその人々のために行われた詩文練習

られつづけたのだということが感じられるものです。ちれつづけたのだということが感じられるものです。と、この講習日だけは動かされまいという意地にも似うと、この講習日だけは動かされまいという意地にも似うと、この講習日だけは動かされまいという意地にも似うと、この講習ははかえって、たとえ世間に何があろす。その頑固さはかえって人の心をうつものがあります。そのたゆみのない講業によってから、まず講習の立直このように寒泉は教授となってから、まず講習の立直

 $\equiv$ 

なるほどの富商でした。この千草屋こそ、幕末期においなさまで、高商でした。 を営む千草屋のことで、当時の長者番付の上位に名を列を営む千草屋のことで、当時の長者番付の上位に名を列を営む千草屋のことで、当時の長者番付の上位に名を到まです。その出講先で当初から最も恒常的で重要な位置表です。その出講先で当初から最も恒常的で重要な位置表です。その上草屋とそ、幕末期においつは、このような講楽の充実ということでしたが、彼がつは、このような講楽の充実ということでしたが、彼がつは、この千草屋こそ、幕末期においつは、このような表である。

香翁は、もと亀之輔といい、当時の懐徳堂の門下生でし治期において大阪財界の文人として著名であった平瀬露て最も懐徳堂を経済的に支えた商家であったのです。明

りしきったのはこの人であり、内山あっての西町奉行と は何度も交代しましたが、つねにその下にいて実務を取 守、高崎藩留守居新家氏、代官設楽八三郎、 行役人、 朝岡氏・田中氏や、 柳川藩邸が 早くから みら れています。しかし、それよりも諸物価引下げのすぐれ 向い、自滅に追いこんだという事績をもつ人として知ら す。そういう中でとくに注目される一人は、天保十二年 ほどの有能な実務家とみられるべきでしょう。西町奉行 た経済政策を立案し、幕府の天保改革にも影響を与えた の大塩の乱のさい、一たん隠れた大塩を探知して捕縛に しょう。内山彦次郎は西町奉行配下の与力で、天保八年 酒井右京亮、 蔵屋敷関係などの武士役人層です。たとえば大阪東町奉 の主な出講先はどこだったでしょうか。それは町奉行や (1公1) 八月八日に寒泉に講業を依頼した内山彦次郎で 商家への出講はこの平瀬家に限られたようですが、 その後、代官竹垣三右衛門、 東町奉行佐々木駿河守等々が、 京橋口定番 米倉丹後 玉造口定番 みられま 他

懐徳

堂物語(III)

駕もこの内山彦次郎の周旋によるものでした。内山自身とみることができます。安政三年の久須美氏の懐徳堂来のぎと出講を依頼してくるのもこの内山の周旋によった佐渡守などの代々の西町奉行就任者たちが懐徳堂へつぎたがのです。その後、阿部遠江守や永井能登守、久須美人が、天保十二年八月八日、寒泉に孟子の出張講義を頼いってもよいほどの実力をもっていたといえます。このいってもよいほどの実力をもっていたといえます。このいってもよいほどの実力をもっていたといえます。このいってもよいほどの実力をもっていたといえます。このに、

この内山と並んでもう一人、注意すべき人物が懐徳堂と関わりをもっていました。その人とは、坂本鉉之助でと関わりをもっていました。その人とは、坂本鉉之助でと関わりをもっていました。彼の書きのこした大塩の乱の子で、与力として知られています。彼はその功によって上ました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本天山の上ました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本天山の上ました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本天山の上ました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本天山の上ました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本医山の乱のでした。

畤 らはたとえば、 悪者の人間観では歴史は貧困になってしまいます。 贔屓の強い人々の間では悪役扱いされがちですが、 この二人はともに大塩の乱鎮圧に功を立てた人で、 元治元年、彼が歿したとき、その墓碑は寒泉が撰書して とくに履軒の『弊掃』を読んでいる記事が散見します。 士たちが帰ってからも、懐徳堂にはしばしば来ており、 の警備にきた武士たち九人を懐徳堂に入門させ、 らですが、天保十三年正月、この鉉之助が関東から大坂 讃えて詩を贈ったこともあり、以前から交際があったよ られます。 務家だったといえるのではないでしようか。こういう当 います。すなわちそれほどに交友関係があったのです。 ったことは、 『逸史』の出講を依頼しています。鉉之助自身は関東の この坂本鉉之助とは、碩果が大塩の乱のさいの功績を 著名な、しかも武士層に影響力ある二人と関係をも 懐徳堂にとって大きな強みとなったと考え 幕府の 開明派官僚 川路聖護に 類した実 竹山の

もずっと寒泉の出講を迎えつづけています。

は先細り弱体化は目にみえていたことでしょう。門人層です。碩果時代の内部的つながりに頼る門人層の維持で勤務の武士たちを門下知友の大きな支えとしていったの寒泉時代の懐徳堂は、このような町奉行役人層や定番

末といえども、まだやはり最も現実的な強みであったに考えられたからです。幕府の力を背景にもつことは、幕です。それが当時において最も現実的で安定した方向とでもありました。それをこのような武士層との交流確保の基盤を新たに確立しなおすことは寒泉にとっての課題

ちがいありません。

あったとみられるのです。

実泉は道徳家・教育家であり、文人との交わりを嫌ったため、当時の学芸界での活躍は目立ちませんが、懐徳堂の教育活動は相当充実したものであったことがうかが大人)が懐徳堂を訪れたときの記事に「学舎、生徒充定らと雙松岡という塾を作り、大阪で尊攘運動を画策した人)が懐徳堂を訪れたときの記事に「学舎、生徒充定らと雙松岡という塾を作り、大阪で尊攘運動を画策した人)が懐徳堂を訪れたときの記事に「学舎、生徒充定の内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各番の蔵屋敷役人であるという形をとっています。町人とその内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各番の蔵屋敷役人であるという形をとっています。町人とその内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各番の蔵屋敷役人であるという形をとっています。町人とその内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各番の蔵屋敷役人であるという形をは高いできませんが、というには一つであるという形をとっています。町人との内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各番の蔵屋敷役人であるという形をとっています。

る機会ともなりえたわけで、その意味で武士層が主軸でません。また武士役人層たちと一定のつながりをもちりとっても現実的で安定した印象をもたせたにちがいありとっても現実的で安定した印象をもたせたにちがいありとしても、武士の門弟が主軸であったという性格は変らませんが、たとえ町人が入門者として多数を占めていたませんが、たとえ町人が入門者として多数を占めていた

ったことも、懐徳堂との深いつながりを示しています。ことをみることができます。河内久宝寺の稲垣菊堂や、さとをみることができます。河内久宝寺の稲垣菊堂や、ますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくったますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくったますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくったますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくったますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくったますが、やはり寒泉の出講をうけた代官設楽八三郎であたのが、やはり寒泉の出講をうけた代官設楽八三郎であたのが、やはり寒泉の出講をうけた代官設楽八三郎であたのが、やはり寒泉の出講をうけた代官設楽八三郎であることができます。河内久宝寺の稲垣菊堂や、周辺農村にも門人を獲得しています。

## (7U)

それでは寒泉を中心としたこの運営によって懐徳堂は

<u>る</u> て、 それが年に新年と中元、および三五九月の節句に納めら らくこれではつねに窮迫状態を強いられたのではないで 定化したようにみられますが、堂の経済状態は決して十 られます。かりに一人の生徒がお金で一年間納めたとし れたといいます。 ただし 寒泉の日記 では、 入門時以外 十文)まれに二百疋というのが普通であったようです。 大体金二朱(一両の八分の一)とか、金百疋(一疋は銭 しょうか。授業料の額は伝統的に自由なものでしたが、 れております(「安政以後の大阪学校」懐徳九号)。おそ である桐園が堂運営費と二家の生活費を負担したといわ ぶ者は寒泉に、桐園に学ぶ者は桐園に納め、学校預り人 分ではありませんでした。入門料や授業料は、寒泉に学 安定した経営を保ちえたでしょうか。それは否です。安 を数え、 するなら(明治二年七月十五日の日記に百二生徒とみえ しょら(安政年間の大阪貨幣相場で銭一貫文=約銀一〇 篠崎小竹の梅花社では、 総額でも百両程度だったのではないでしょうか。 金一両=約銀六〇匁)。 せいぜい一両弱、 饅頭とか餅とか半紙とかの物品による謝礼が多くみ また小竹自身が 潤筆料を 稼ぐなどして 嘉永頃 多い者でも一両半 程度 だったで 毎年約四十~五十人の入門者 また仮りに生徒総数百人と

> 追い打ちをかけていました。 で年五百両ほどの収入があったといわれます(木崎好尚で年五百両ほどの収入があったといわれます。そして公開講義の夜講が無料すくないことは確かです。そして公開講義の夜講が無料すくないことは確かです。そして公開講義の夜講が無料で年五百両ほどの収入があったといわれます(木崎好尚で年五百両ほどの収入があったといわれます(木崎好尚

考えられますが、まったく記載されないのは不審です。 その種の記載がみられないのも気になります。 遠いものだったと思われます。几帳面な寒泉の日記に、 されたとしても、 裕な商家はみられないようです。つまり一定の助成はな 占め、ほかには平瀬氏、山片氏などをのぞいてあまり富 のち、小宴を開いている様をみることができます。 体十数名の出席がみられ、『逸史』などを講読しあった も原則として毎月二十五日に同志会が開かれており、 る人として同志が存在していました。この幕末において あるいは記すほどの助成がなかったのかもしれません。 ことは預り人の桐園に任せて、 しそれには重代の懐徳堂門下である学者たちが約半数を もちろん懐徳堂には、このほかに経営を助成し参画す 天保三年(一台)碩果時代に六十九名からなる大規模 それは経営を十分なものとするには程 自身関知しなかったとも これらの しか

に対してのみ、さらにもう五年の期限延長を願い出て承約でしたが、五年後の文久三年になって、今度は平瀬家家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、家に貸付けて、その利息を関けているという性格のものではありません。これは年限五年の契宗に対してのみ、さらにもう五年の期限延長を願い出て承認できる助成は、安政六年(八元)の白山彦五郎と平瀬記できる助成は、安政六年(八元)の白山彦五郎というは、安政六年(八元)の白山彦五郎というは、安政六年(八元)の白山彦五郎というは、安政六年(八元)の白山彦五郎というは、大田の大田の大田の大田の大田の中では、大田の東京により、大田の大田の大田の大田の大田の大田の大田の大田の大田の東京に対している。

諾をうけています。

ってきたといえます。

(H)

慶応二年(八六)正月十七日、寒泉の古希の宴が懐徳堂で催されました。この四日後、二十一日は薩長同盟が成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときで成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときで成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときで成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときで成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときで成立したときで、幕府倒壊が目前に追りつつあるときで成立した。

います。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、このできませんでした。懐徳堂では、この激動の時期において、なんとか永続の方策を見出そうとしました。慶応二年(八次)十二月、かつての寒泉の門弟で、当時、京都守護職の会津藩主松平容保に従ってきていた医師高橋順守という人から、朝彦親王が懐徳堂を再興したい思召をもたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・もたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・もたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・もたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・もたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・もたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・はすぐさま上京して協議しましたが、この地ます。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、このいます。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、この地ます。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、この地ます。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、この地ます。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、この地をませんでした。

懐

まいました。 わかりませんが、 まったのでした。 とき思いがけなく孝明天皇の崩御という事態に当ってし この企図もそのため立消えになってし これがどれほど可能性があったものか

そのこと自体が懐徳堂の存在を位置づけていた以上、幕 だけで、当時なんの援助もうけていなかったのですが、 府倒壊を目前にしながらも幕府との関係を断ち切ること ところに、懐徳堂の存在そのものが抱えこんでしまって は「憮然として退く」より外なかったのです。 なかったのです。取りつくしまもなく一蹴されて、 た。しかしこのような時期にそれが聞き入れられる筈は 生の勉学をなんとか持続させるための援助を願い出まし いた矛盾悲劇がありました。懐徳堂は、諸役免許という 時ここに至って、なお幕府に願い出ざるをえなかった 慶応三年正月、今度は、 直接、大坂町奉行所に、 貧書 桐園

はあまりにも遅すぎました。

は未決定であったからにすぎなかったのです。 望みにすぎませんでした。新政府の方針がまだそのとき ありうることを喜んだのでした。しかしそれは束の間 あったにちがいありません。寒泉たちは、存続の望みが す。廃校を言い渡されるのではないかという危惧は当然 とは「まさに旧典に従らべし」ということであったので せんが、 そこで 言い渡されたことは 意外にも 学校のこ 命がありました。不安な気持ちであったにちがいありま の管轄局であった大阪裁判所より寒泉・桐園宛に出頭の 幕府倒壊を経て、新政府となった慶応四年三月、

れは直接に廃校を意味しませんが、懐徳堂の経営状態に 許という特権を取り上げるということだったのです。 ということでした。すなわち旧幕府が許した除地諸役免 を以て年を経、以て今に至る。自今まさに出税すべし」 しましたが、そこで言い渡されたことは、 再び裁判所から懐徳堂へ召喚状がきました。 扶持遣シ、諸役免除等申附候儀、 令が出されました。 (傍点筆者、『大阪府令集』一)。 そして同年九月五 しかし翌明治二年一月に至り、次のような新政府の布 「旧幕府ヨリ苗字帯刀差免シ、 一切廃止被仰出候事」 「書堂、 桐園が出頭

とき以来、

府しかなかったのでした。これは懐徳堂が官許となった は懐徳堂にはできず、ここに至ってなお頼るところは幕

ひそかに抱えこんでいた最大のディレンマで

きそれがはじめて鋭く意識されたでしょう。しかしそれ のディレンマはより深くなっていたといえます。このと あったのです。幕末期に関係を深めることによって、そ

税を負担しようとすれば、堂を売却するしかないことをとってそれは廃校の申し渡しと同じ意味をもちました。

しています。
き、覚えず涙下る、須臾、言を出だすこと能はず」と記き、覚えず涙下る、須臾、言を出だすこと能はず」と記意味したからです。寒泉はこの報に接して「翁これを聞

影を落としていたことでしょう。 また旧制度の教育機関であったからでもなく、また旧制度の教育機関であったからでもなく、また旧制度の教育機関であったからでもなく、まさいが適時をあるという形においらことのために、その特権を剝奪されるという形においらことのために、その特権を剝奪されるという形においることのには、幕末期における武士層との接近関係が一定の接触を落としていたことでしょう。

た。

見かへりて出づ」の歌を門に貼りつけて立去ったのでし

十二月、「百余り四十路四とせのふみの宿けふを限りと人に売却されました。寒泉たちが堂舎を去ったのは冬も

皮肉にも、かえって明治新政下における廃校を速かなら寒泉による武士役人層を中心とした門人層再確立は、

しめたといえます。

れてつぎのように記されています。でした。懐徳堂のある尼ケ崎町壱丁目水帳には貼紙がさこの屈辱的な命令もやむをえずのまなければなりませんた。そこで氏を廃し、屋号を名のるようにいわれます。九月二十日、裁判所からもう一度よび出しがありまし

甲井屋

修二面

明治二巳年九月廿八日

を買い、懷徳堂は油掛町に住む天満屋(安田)広介なるては閉鎖されたのでした。十月には本荘村に新たな舎屋すなわち明治二年九月二十八日、懐徳堂は学問所とし

歩む新たな道を開きつつあると確信します。事情を一つの教訓として、大阪に生活する人々とともに三たび興ろうとしています。そこでは、必ずこの廃校のしかし懐徳堂は、明治の末に再び興り、そして今また

です) (付記、本稿は昭和五十九年三月二十五日、誓願寺におけ

(大谷女子大学講師)

懷徳堂物語(III)

「学文所御廃止自今如此ニ成